

## 「具象化鏡」

(てんとう虫コミックス『ドラえもん』39巻 大全集13巻)

教育学部一回生 岡村優太郎

あらすじ

いつものように勉強せずゴロゴロしてばかりいるのび太。そこでドラえもんは、言葉のうへの表現を具象化するひみつ道具、具象化鏡を取り出し、「時の流れ」をのび太に見せる。だが、勉強してもこの日受けたテストの手ごたえが良くなかったことでやる気を失っているのび太はふさぎこんでしまう。そこでドラえもんがもう一度具象化鏡のスイッチを押すと、のび太の周りが暗くなった。「暗い人」という言葉を具象化したのだ。道具の説明を受けてもよく理解できないままのび太が具象化鏡のスイッチを押すと、どこからともなくキツネが現れのび太の顔をつまんだ。「キツネにつままれたような」という言葉の具象化である。これを見て機嫌が良くなったのび太は具象化鏡を持って遊びに出かけるが…

この話の良さは多岐にわたる。まず、ひみつ道具そのものの秀逸さ。この話を初めて読んだとき、「なんてユニークなアイデアなんだ！」と感嘆したことを覚えている。加えて、のび太が言葉のうへの表現を具象化していくテンポの良さ。そののび太に特に突っ込むことなく平然としている周りの人、先生もシュールで面白い。そして最後のほのぼのとしたオチ。この話ではこうした原作の『ドラえもん』らしさが存分に発揮されており、全10ページどれをとっても隙がない、『ドラえもん』の中でも傑作の部類に入る話だと私は思う。

ただ、どんなに言葉を尽くしてもこの話の面白さを十分理解してもらえる文章を書くことは私にはできそうにない。この話は「言葉のうへの表現を具象化する」面白さが描かれているため、「漫画」であるからこそ面白さが伝わる話だと私は感じているからだ。この面白さを「言葉」で伝えるのは困難を極める。

これを読んでくださっている方には、ぜひともこの話を漫画で読んでもらいたい。